

漸弱無底抄

長久保

特別
~12
1077
43





利
1077
5543



雲隱

一巻ハ有其名之云々 祠源氏君崩
 一始事と云々 二終約
 不也 柳紫明抄ハ六条院
 始滅と云々 始事也 幻巻
 世伝より云々 未心事云々
 始ハ不事云々 始ハ不事
 二三年の事
 世伝云々 始事云々

六条院嵯峨院よりうづらりて
あつらひて終に造るの御授を
明らうとて悉く河海抄を
とありてあつらひて造り
源氏君たりは今年よりと
まりぬれりとのちを葦原
乃事成年立にりて作り

葦原六歳

七歳

八歳

九歳

十歳

十一歳

十二歳

十三歳

葦原七歳より十三歳まで
を御授の中より不見あり六
条院徳春嵯峨院より并光とれ

終人事事はハケ年の中に
こもり侍るへ

河
巻名 有巻名 其 辞義抄

巻名

白巻部 郷 宮巻 一 巻 一 巻
巻名 一 巻 一 巻 一 巻

一 巻 一 巻 一 巻

は巻名 一 巻 一 巻 一 巻
てその 一 巻 一 巻 一 巻
りて 一 巻 一 巻 一 巻
らる也 一 巻 一 巻 一 巻

あまのこも万葉集より人の道
去まらば皆ぞかかれとらり
う削皇子薨時置始を人か
大君ハ神よりませハあまの宮に
つひハ乃志さたにくれぬのぬ

大伴 皇子被薨時作方

とてけて此志の神の池よりかく
鴨とそよよの刀にてやそくかれ南
祚龜六年大伴長屋王賜死

し時作方

大君此みまこころみかありまの
時りの阿の神とそくかれぬ

天平七年大伴郎女歎新羅后
理願死去作方

とゆんえぬ命よりあれたあぬれ
家よりいつてそくかれり

け介相好一作高乃奇少とあ
詞あり

めくろあひてらんやれまのふ
やれまのふ

一 名りりしきそてきと見えぬ

天名不立四教 三教教 通教 別教

四門 有門 空門 亦有亦空門 非有非空門

有門得道ハ毗曇空門得道ハ成實
とありせり非有非空門を迦旃
経より説亦有亦空門ハ昆勒論
よりありせりと云けやると云

論 天竺よりやきまりて漢
土より持来きに云くを大師の
門空門の義ありとありて
經論と云ふは因別二教と判
ふ不思議是大方りと云
乃其も此胸中より
まりて世より法さつと成
よきん論十ふ不亦空境ハ朋法
あふにいしと云ふと云の巻力

名よりこめらる家後甚深此節より
しや凡上古の名賢乃中より
終乃やう法人志くは事或
内大臣以下を例に引く本朝
神仙傳をくるとおほく見
多り又好文の道先達業平
朝臣芳野川と上此石室とん
の川よ入定しを分く彼所
此縁起よりさゆと云

一六条院の滅亡事

黃帝此天よの初りしり比
擬と申し中古此先達ヤと
考り物統の初りしり所なり
今葉とありありなり宿も卷
りし葉古將乃初り初院とせ
初のて後二三年くくり来
世成りしり初り初院とせ
六条院よりしり初り初院

の心おさめんかゝる如くも人徳を
とらり世にのりて語釈
は隠居しりやと云ふも
且重徳奏とて一指あり
この書中此久をくわう
とて同は朱荏流昔部
大政大臣磐里大臣以下の人
多くせられり何とて
とらり世にのりて語釈

や又白書御 甚中將幼巻
昔吾卜り 幼雅と人く
之曰叢れ白昔部々巻り
元朕あり中ね付ゆとみ
是あめりおひあし
け書ハ名のこありて
りしりしりのこ
六条流乃昇 後之事との
さしりしりて

けけたり幻巻の終は紗子乃
 月とありじつとる程し一と柔流
 なる水臈しるふとかの巻り志
 事とるより一慧明抄といふ
 述と宿本巻しり六条後世と
 うりしる始て二云とりり後臈
 乃流し一隠者一ゆへありし
 尺くしうれはは初あせ水臈のり
 きた河海しりやふとれとりり幻
 巻のい慧とちおのふ柔のめしり
 白き御巻ノ始りしひりりく
 述始しのらしりり初ありり白
 文の巻りしりりり十甲とる
 慧此六載しり十云中々の同
 八十年の事し一お流の行りて
 一いみしるはるしり一重隠乃
 春の中ははる流しり二三年
 隠者してその後朋御しりり

るはは事なり 詞ありし志は
とく 大 柝 卷の若かりあり
て 初 成 人 ぬ 事 天 台 此 日 教
法 門 之 例 一 行 され とも 瓜 地
と 成 入 心 ち 一 行 一 倍 書 事 也
て 一 一 毛 詩 乃 小 雅 乃 中 一
南 該 白 華 華 黍 由 庚 宗 丘 由
儀 の 六 篇 の 篇 此 名 乃 一 あり 詩
の 初 一 一 一 是 一 逸 詩 一 一 一 一 一

や 是 詞 あり 一 一 一 一 一 一 一 一
これ 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
人 初 成 法 一 一 一 一 一 一 一 一 一
を 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
可 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
ひ 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

のこありてその詩を記しむか
———

^新 雪のつれづれい人乃遊を伝ふる
之百葉より人の遊去時の奇と
とめえぬ命よりあれはあぬ此
家よりつれづれづれづれづれ
はての岩子の流りたる鴨とを
ふのこんをやを徳と好んばお不
可辨けられはは巻をかられは

ぬ名は源氏麁———
のふはりつてけふ名之隠有を
くれ同くは源氏のこゆ千幻
と句をその巻乃同八ヶ年此内
ありこの人くせしむるの成皆
は巻よりこはるりこくは巻の若
しりるそつみくわ事ハ天台よ
有門を門亦有示る此有北堂
門は四の乃有門ノ得道ハ昆蟲よ

あゝ空門の得道ハ成実ハある
きり非有非空門ハ以道ハ迦旃維
説亦有亦空門ハ以道ハ毘勒論
ハあゝきりハハハハハ迦旃維毘
勒論ハ天竺ハハハハハハハハハ
漢土ハ不來維ハ大師有ハ空門
の義ハ執てハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハ
毛詩ノ小雅ノ中ノ南漢白華ハ

黍由庚山宗丘由儀ノ六篇ハ篇
名ノとありて詩ノ詞ハハハハハハ
是ハ逸詩トツハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハ
て吏廣微トツハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハ
選ノ才十九ノハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハ

とあふふよつとつてい巻十志
名一り二先ふふ不甚深高持乃
作志心之凡上古乃名賢此中
一終のやうに人あふふあふ
武内大臣以下に例多し一
朝神仏傳あふふとあはく見
了ぬ久此道の先達業平朝臣
右芳野川と上ノ石磨てんま
川よ入定一けふく彼西縁
起りありていふかやの
ふも終はあふふや
内進ハは物持好むはあつ
花鳥風月とりてあふふ
と仁義礼智信とあふて
人乃善悪此を一人又天
旨空假中と亦有門空門白つ
と知りてあふて感者必裏
理成何しり一相壺乃門より

初てより分業上源氏一初ノ同
内業也なりあり一也一也一也
ていせし徳也只いしははしは
人よ仏也とまゝなりん為此依は物
依ノ奉念とまゝなりん天台可立四教
一ハ三教二ハ通教三ハ別教
四ハ因教也い内ニ是ハ界内ノ
事ト教通教ハ界内ノ理教別
教ハ界外ノ事教因教ハ界外ノ
理教とん一ハ是ハ法法至深
ノ深身之是ハ法門の如也源氏
此事より一ハいはいは華教
阿含方等般若法華涅槃五時
と曰ふ分て沙法一ハ多なり成り
より六ありとも涅槃成法花
今く法相より一ハ時と三あり
四教ノ有門空門非有非空門亦
有又空門とあり分て教よい

是少と曰門あり有と云ふこと
も分てその時ハ三教あり有門ハ
あり通あり空門曰あり非を非
之別あり亦有亦之有門得
道あり異量ありあり之然に空
門ノ得道と成実と云ありあり
非有非之門ハ迦旃經に説り亦
亦空門ハ毘勒論にありありと聞ケ
有は經論ハ天竺と云ふゆりて漢土
ハ將來きん然成大師有門之門
の義に取ていふこと經論と見及ハ
さうありありと判りあり是ハ不
思議也

又曰弄花句宮卷ノ端に述中論
今書は起り

空之徳と名付事ハ百葉弁あり
有名無実あり天竺四門事碎書
在河海

宣假中事有源氏物語中
以物語作物語成以空通之
又此延喜本者假諦也靈隱中
尺尋又時發同以物語示人
又又十四帖皆示空之意又源氏
之隱之後源氏流經始之
乞以又示有示空之
以物說先書好色通終亦佛通
意可見見水波之譬言有之

又云靈隱事以物說中貴人
亦無常之祇哀情多之自初至
靈上院事在源氏終
粟不言之若書之者可言及以之
又身跡氣仍靈隱卷中讓之
幻卷与以卷同九年右之
靈ノ年幻卷中又靈ノ六歲
以十四又九年

又秘抄靈隱事別有源氏白文卷

端之聊裁之今は西に去如し
柝才丈六に云徳巻あり人責事
古人の難義とせり徳進と列後
河海花鳥こらりく志るるを徳
とつり人の逝去事との古来
用ひ事れり禁忌と人との初也但作
者ノ式部弁云かられし一秋
中此月うおとふんるのあふら哀
傷は何と云ふ凡は切終は河海
之いつかく天名乃は又とる
作物終之有に空道也桐葉帝と延
表帝よ此より西類ハ假帝といふ
隠ハ中道之尺等五時乃表は物
預のうらよるあつたり六十四指
亦有亦空門心也奴文ノ道も終ま
仙道よぬむらふくも也やんり
畢竟は雲隠ハ名んくりりて
不書く説を介然と云ふ物終一節

の中 哀情 紙のまわり 人さめく こと
事つとま ありけり 源氏 明治の世
より 成志 ありき 言終も 及へく 氏又
行なり こと 皮の ありき へー の あり
作志 趣 白き 言 ありき こと

箋は抄同し 句 昔 文 卷ノ 端ニ 被 載
又 今 書 加 へ 年

蓋 自 六 葉 至 十 四 葉 八 ヶ 多 ぶ
漏 脱 あり

け 九 ヶ 年 幸 一 二 在 乎 源 氏 卷 中 也
その 取 引 巻 末 へ け 卷 八 末 七 へ 中
同 末 末 六 雲 浪 と 云 卷 ノ 題 号 あり
立 一 之 実 二 其 卷 シ 不 書 是 刻 筆
志 一 妙 術 也

源 氏 一 世 一 行 快 德 厚 々 譽 る 可 也
智 人 一 勝 解 華 世 一 趣 々 行 其 身
ノ 終 一 有 極 普 通 一 儀 シ 以 テ 可
符 合 也 司 馬 遷 班 固 范 曄 温 華

力可不及經或木食草衣法道
惟仍儀維如佛在世時至其
奇物若又現神變不思後者人不
可信或入滅之時聖衆如星
列紫臺之雲引親來迎相之
オシモシハ目馴テ尋常ノ物語似タ
へ人天悲之成し五十二類悲號啼
泣ノ想ハ佛ノ涅槃ニ及ヌレハ是又事
旧タリ 若又登仙換骨メ其骸

不留ト云トモ頗可似虚誕依同
文ノ所不及一言ハ如却向善
尽養者也

惣別ハ物語衰傷及教人相垂更衣

夕魚上 菜上 柏木 木常山草

紫上 木若由之 相垂帝 本ニテ私入之

是亦皆年々及ヌレハ大方ノ筆力ニハ
不可符合去け上シモ一廉ノ文
章シ輝スヘキ事ハ式部カキ

裏。有ト知レシ御筆不及ノ文ヲ
闕ストハ不可見一切ノ事不言ノ妙
妙所アリト云事ノ小ス義也維摩
一點則于言万答是也

有卷ノ名無辭ノ例

紀多
毛詩才九

南溪ハ孝子相戒以テ養也

華黍時和歲豊亘黍稷也有其義而亡其辭也

白華ハ孝子潔白也
才計度ハ万物得由其道也
由哉ハ万物之生各得其宜也

崇丘ハ万物得極其高大也

有其義而亡其辭也

紀多
此六篇有名無辭此曰逸詩古有

辭紛失依之吏廣微作

補七詩 文選才十九討甲云

補七詩六首 吏廣微作

吏哲 字 廣微 陽平人 卿飲之

礼然一詠レ詩或有義无辭音

樂取節一闕而不備於是遙想

注

既往存思在首補著其文以綴旧制
晉書云掌覽周武王詩有其義亡其辭惜其不備故作辭以補之
朱晦菴元名為樂曲之名故元來其詞不可有之卜尺下云

河海
因石不見卷事

天台四教

三藏通別

四門

有空亦有亦空

非有非空

有門ノ得道ハ毗曇

空門得道ハ

成實ノ明ス非有非空門ハ迦旃經ニ説

亦有亦空門ハ昆勒論ニ明ス

ハ經論天竺留リ漢土ニ不將來ルトシ

大師有空ノ義依リ未見經論ニ

以テ有因別二教ノ判シ給不思

議云

^{弄花}此空假中三諦事

依作物語十一 無實 是空諦也

以桐壺帝比延壽之類 是假諦也

以雪原卷 無言無說之處 是中道也

一代五時之教比切彼之深意也

^何上古名賢之中 不知其人之
給事

武内大臣 本朝神仙傳其例

多也

業平朝臣 芳野川上石室中

入定之由見緣起也

等 源氏不知終卜、不二謂之此例

不當

又一說亦系流、如臧之給之黃帝、天
登之搬入下也

河海云此說中古先達、今輩之不

可用之 宿本卷三 兼大将ノ祠
在院ノ後ニ後二三子ノ来
世成リしニ終リし乃院リ
も六条院也と云フ一のそく人乃
心向さめんしと云くめん終り
世成道ニ達成地リ 終居一
終りしと云くめん終り 終居一
是乃中此久近側リ 終し
中

朱蔭院ノ崩御

其部ノ文

致仕相國

頼黑木后以下薨去

然者

木蔭院沙シノ如減ト云キ此ノ

ト云

笑曰は河ノ説正義也

言ハられと云祠事

は祠多ク人乃逝去ノ事ニ古来

用事しリ禁忌ノ祠ナレ

但此作者 或部ノ云

めくり逢てみるやきれたわぬまに
さうくれあしうら此月か

いそ 越哀傷

又金葉身九瑠川院御時津信守
の式部丞申すを分申又うりそ
多うそ

日此光あまのひふりえ乃きし此也
我身むしうのさかれば

いそ 亦非哀傷

雨降吉函とくに用れ詞ト見たり
然とといそ隠巻り於てハ哀
傷のふよ用たりそ例繁多し

万葉 う削皇子薨時東人方

大君を祚しし中せハあま雲此
ソゆ人の下りかかれまひぬ

同 大伴皇子被死時

のけり乃若祢乃池りかなく鴨
きよのみそや雲かかれ句ん

同日 神亀六年左大臣

長屋王

賜死し時

大臣此命を以てして大阿闍梨乃

時りハあはれと云くはす

日 天平七年大伴部女悲歎新

羅危理彩死す作号

此女之命少くあはれは女妙此

家よりいつて云かたきなり

い卯繁多

私

美因云此書源卷其初方より

何程ありとも知くし中何ハ八

ヶ年乃同り阿まき乃事紙

こはるなり凡物流る六十帖ハ

ひおのりきりさそ流布すか悲を

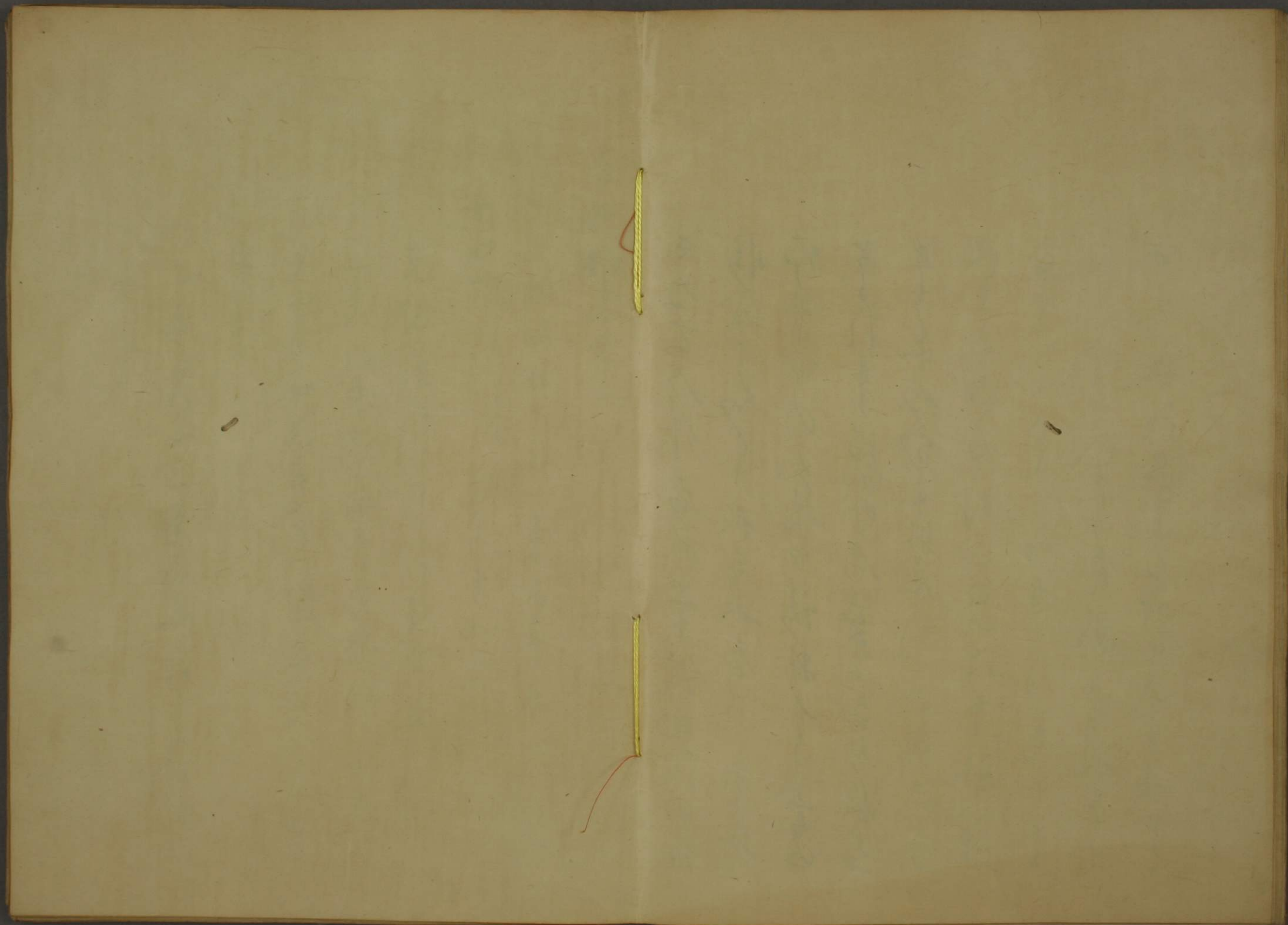
八十帖有り結造ハは巻り若

菜かしのまき上下多きや

らん又上中下と多きやらん

も志しはあて云かたれ乃一二

かゝ冊教あまゝと仰んとも知る
—又夏乃うま橋と記さ
多うやうかうしは違ふともあ
あまゝこのへに絶ん六十帖の教
ととあふ—
名ありて辞たは此篇六篇也
は物終と六冊の巻をうり其心と
たう—後乃絶り解り此事は
心りあ絶てあはに記あは
さぬふ乃作者此筆法物終の終
情成とく—たふな—
情—その外を法抄なり書の
とこれと外乃事りあされん
り—あふ—外ん



白兵部心宮

私心卷より心董君年立

十四歳

四位侍後

白文十五歳

光陰後仰方々此處分事

三文所元服後号兵部卿文事

夕穿右大臣在後一条文所花友里

良事

一条文与三条友每月十八日通任

給子

董君為冷泉院住持子右院元服
事

今年二月任侍從事

十八歲

十六歲

秋任右道中將又任宰相

秋源傳後任右道中將

秋八縣乃除目下任中將

十四乃年此秋有八

院淨結加階事

源中將冷泉院中設曹司事

母女三交喚念佛西行

源中將類吾身非六條院住子歛

源中將有異事

白告乃交楚花事

十七歲

十八歲

十九歲

秋任中納言

董宰相中將叙三位事

は巻親云十九より始りて位
乃宰相よりして程中納とんか
ま終りす下とてはは宰相中納
りしてははとありて位り
たりり始りて宰相と中將と程
りのおとくありてははの位り
宰相の四位のお當の官たり
也宰相中納とつと事ハ
橋姫乃奏のくははははは

句文思念院女一宮始事

兼中納と系二系文り

夕雲右大臣の友内侍服六君为一系

宮養子事

お六系院く約賭弓還養り

子時夕雲右大臣兼左大将

句名多文 或句文一名兼中將

以初為卷名

物終は是の世人は如何なり

印家の中ねとさうふくつひは
書て

養依く有支極く名

元徳乃後ハ董大將乃年齢紙
りて年紀をさへ——は巻よりハ
りり分十四又廿七元服して始
て侍候り任——十九めて宰相
中ねといふれ——中へ六ヶ年
乃事紙のせたり

秘

卷名以詞考く 共了卿文とと

又董大將事ととり柳才亦六
は元徳卷より入事古人の難
文とせり然と別紙の海花考
りりりく志分さう書とれと
いふし人乃題去乃事りの
古来用事きり禁忌此詞とと
ア事也但作者の式部 号と中
かく事あり 報中乃月、紙、中

よめ家のあやうら哀傷よあ
さ侍は物終の海女といふ
おしく天倉の清又めてもなり他物終
たふ家少の空通は桐壺帝と延在
帝よ比もかふ乃類の假帝なり
古の雪隠の中道は天宮大時乃
まは物終なりらりそかひまう又
十四帖皆亦有空門の心也好文の
乃と終りの仙道なり改らる中
きららなりなり也畢竟あは雪
隠の若りりめて不書し説て然
そ家ハ物終一部なりらに哀
傷とて事終人さ改くしりて
事つて事ありは卯よ源成の書
のり紙志るは云格も及つ
らは又お終り事あり
會しハ略し作者此趣向を
吾老へ幻巻といふ句乃巻との

同九年をくくはきりり
蓋乃年齢とりて年紀とく
ふた幻巻りりてハ又歳也今年
十四歳めて元勝乃事あり六歳
より十三までありハ中後
の中ハ格付りさふ之想して
解りりさの巻中して年紀難札
なり別ハ志をとり記名ハ十四
より十九までその後ありとあれ
たハ乃喜中てのりハくあり
ハ喜幻巻の次年より蓋二月ハ
元勝とありして九ヶ年の蓋ハ
幻りハ又ハ喜乃始り十四
ハとあり此巻末ハハ喜ハ
事あり
蓋十四歳めて二月元勝乃の林
中ハ任ス又十九まで三位
宰相り任中ありハ下の蓋ハ

并字活りしむへは巻り混れ
世家下あり別抄物あり
先雪隠乃巻りとのふ
は義別り一冊に載し四略
又秘あり

光かくれゆり後

ら 六条院崩落あり 義

涼草乃みよ此御国忌よ 文全康秀

右 草少貴殿乃音り新かくし

てふ日乃くまり多ありわあろぬ

光君源藏院に隠居しゆひて

二三年のら津わり昇殿し

ゆり成り義

秘 源崩落の後とあり

義
高号乃存と崩御といふ也

それゆゑより立つきあつて人

源氏君乃容儀文能操徳化と云

き侍くつて人仰子孫乃申り

無き人 義

うゝゝ此由末くは

秘
夕秀乃由末く

夕身此由子多き事れと及ん

悉き一人も不見及ん 死

木乃乃今と云く事とすのん

古の事なり

死
是ハ冷泉院の由也源氏の事と

子の中は初也と云ふ事なり

秘
冷泉院と源氏乃由末と云ふ

源氏乃ゆゑに是れハ是れなり

白くし 義 弊

多ク
当代乃云々 秘 白宮大

白くし 源の由孫 明石中文版

おろし ねむりて おひ 出給
文乃 君

^母 女之宮殿の葦也

^葦 葦也 二品文此西殿の是く文殿
よつて文乃の君と稱し
也 ねむりて おひの六条院と云
白と葦と一所なり 葦の三月と

こゝ也

^花 二品の白文也 宮乃の君の葦也

二品の文此西殿なりなりと云
文の若君とつりてと云に六条
院なりておひの六条院と云
氏乃西條文のこの君を西中の子
なれと系當りハ西子の侍りに加
ふの按侍也

^何 おろし ねむりて おひ 出給也

いしすまのゆきまのいしすまの
源ノ世ニ皆量セハニ為重源也 是し作
者批判ノ語也

養今ノ世ハ校
詳多也と著ノ

身
とけりともきくれあつて
後群の人よりいひては

きりよのほひなりん
あそにたまめりく

等
け白とくあつとは普通なりとく

まをきふんくさゆあれいあ
わは根ぢりして源乃西来く

をりりき後一叩とく人
よ源氏乃幼女よむら後

時よりと世乃おほく

あは

はかほたきひり人たおひ

えり

源氏乃湯衣あやう人乃あ

あし源氏幼少の時より人

のあはあふれとてこれと源

氏の西威光ゆふ

いあし乃ああ入をいひり

源氏君乃きりばかありしれ
所時はりそきりしはありしなり

源氏も大后かよのき移りぬ
しぬ

源はりしておの徳こそ是なり
じんもあり又たけぬのあり
とよそりしは是は源乃所末
うりぬりしは是は源乃所末

主人は徳りしは源乃感
光のありしは

おのりしは
おのりしは

美

け一句奇妙の源乃き移りぬ
感光のありしは源乃感
白き意乃り分の法の名ありしは
く相重巻りしは源乃感

おぼくはふか物なりとせりしとあり
まゝいふもそしめばむらり
ゆかしはあはくしりい白と茶と
おとほぬり世乃おほくのまゝり
さふたふかい法も急すおとせ原
の感光乃法りいといふは
世別世とと明くのいふは
得ふ事い若き法續ては乃
事りり法若き法のあはれおほの
人いこもし世乃おほくは乃
是をいふ法は法のいふは
也後人乃いふは乃

春宮といふは御人といふは

朱藤院乃西孫今上乃第一皇子
明石中子殿

見しとききしは乃いふは
今上明石中子殿
白あはれりいふは乃

うしや 秘

心やとれからあつた

秘 二条流し

女一文の古条流しとれみの所乃
東の多女の流

秘

女一宮の東文と西一版世の上
御一かくれ娘のそ古条流乃
東射よその世れは世のくひあ
あふん後多く多し

秘

は志上乃西房 女一文乃御
申し

胡夕よあひ志のひ

志上乃事又深ゆのし
とらえ

二宮と御あしはとく大志んあひ

秘

或る多し

秘

白文乃同胞の先 秘

秘

二文と東文乃御一版梅はり

正曹司めて時く六条院の寢殿
と云やすもあうして夕暮乃
右大臣乃中君成りて所
也

^秘中君の平君存るる

右乃のむいとの中君也君

^秘夕暮の事

はのの坊の子也

^河左の秘かとい物成也有り有

そ是用也

今乃喜文部位よりはるる

これ二又又指り申らるる

也子の名切ひるといふ

大との所はとあり

^義夕暮女子六人あり

はのれれまはにまは

^秘は白文つるるりま

人ともあり

大姫君奇の喜多子奇の御中
二子奇の御中
三子奇の御中

御中

は

齊奇白奇 十六奇六奇菜奇や

夕奇音奇の息奇女奇は奇り奇

わ奇の奇り奇

好奇父奇の奇名奇 等奇

ね奇と奇何奇ふ奇や奇り奇乃奇物奇と奇ふ奇り奇

同奇振奇乃奇物奇と奇ふ奇り奇 秘奇

振奇乃奇物奇の奇振奇乃奇字奇と奇ふ奇り奇と奇ふ奇り奇

と奇ふ奇り奇と奇ふ奇り奇の奇物奇と奇ふ奇り奇振奇悉奇と奇ふ奇り奇

振奇乃奇悉奇也奇正奇本奇乃奇あ奇ふ奇り奇と奇ふ奇り奇

と奇ふ奇り奇と奇ふ奇り奇の奇物奇と奇ふ奇り奇と奇ふ奇り奇

乃奇多奇と奇ふ奇り奇と奇ふ奇り奇と奇ふ奇り奇と奇ふ奇り奇

乃奇多奇と奇ふ奇り奇と奇ふ奇り奇と奇ふ奇り奇と奇ふ奇り奇

乃奇多奇と奇ふ奇り奇と奇ふ奇り奇と奇ふ奇り奇と奇ふ奇り奇

琴
うふりーの寒りあふ人さ
とつねり用ふ事ありそ
心あふー
和
あふ人さ事かといふ
おー

又さか西へ一頁

又ささきとと西へあるんさ
らさすいあーやと

六乃君ふんそののの

花
夕香此流女若内侍のよけの
腹くやり本此巻く白ふ此
水方よりりまふく
和
印り本巻く白ふあは
美
人長女兄弟三人主上運枝相違程例
右並相師捕云

安子中宮 村上佐
登子尚侍 重明親王上
三君 高明公室

さへくはくひぬくしあへく

花 六条院よつとひぬりし源氏

伊 乃内御公ひんあつとひ

伊 六条院の人くそ寄

おつすつとみとみままに

人くらりくくくしぬるあけ

事候云

ひんくしの院

伊 二条院乃東院へ寄

寄 源氏の時うけりせよ末はじうと

うさ

兼 寂前と花ちか里乃と

あへ

入道宮の二条乃あり

伊 女三々

三條院の末後院よりぬりり

あけりんく

とまらぬのゆりし

^抄 明石中宗之秋好りりまきりハ
うーとん今の家風くんる
るん 琴

院乃うらさひーく

^義 六条院へ

うー人のあやー成みまきくーけ家
うーり乃世ーんとうんてつる
ーめーが家わ

^義 華清文、魏漢家奉朝一条

一落みれかくのあやーく
やと東六条れ融云乃何条院
と思ふらうー

世乃るーひとは祢がく

^抄 門前零落鞍馬掃の心

ーとーれまらに切の一条乃あは

落葉文之

^抄 花ちりり里乃恒まひー方之 ^義

三条乃と書しに十日見の

花 昇 秘
雪井宿

夕暮三葉文よ位紙ひり

夕暮のねりて此雪井宿と花葉文

と十文見つてひり位紙ひり

うづかの物珍橋のふり巻云たの

ねりてひり位紙ひり

ねりてひり位紙ひり

いふふりてくとしつふかの中あ人の

名紙とりてとしつ紙ひり合えん

あ

半ひり此末のふりかたりきり

秘
明石上言此人ひり紙りふり

ふり宿紙也きりてんふり

昇
二葉鏡りハ白文六葉鏡りハ女

文二葉文此位紙ふり事之花

鳥同ハ但人ひりては明石

中二葉也ハ箋曰中二葉ナリ

内ふりてハ何あハハ是ハ明石

上代トアリ

私次乃初よ的石の由こゝあり

大とのいり門も此事ととも

夕音へ 源の由とともそのこゝ
編題ありと也

多いのうら乃やうめて

世^秘上れありこれよかゝ乃あゝ
して備へしとともぬ事くらりか
くあひま之 義

とよひくにいつせととも

史記 義

世のいひ火成きらるやうよ

佛此夜滅度 如薪盡火滅

法華経 義

つぎりたれ此のいさり物也

源乃由事ハ中しくヤリととも

義

まゝか乃此れさゆ心よ志あり

六まのりたりにしんさ後後源よ

つとむ松人の志はひつるまじや
去乃花さうりいけふたうぬり
しとあやしまうか物とせん

ありて世中しんそののうたれ
ありて世中しんそののうたれ

河海花鳥にありかくちうとあはる
しんそとつうよて然れ

海さふしと云細あまきいびやと海さ
ふしとあまきいび

ふしとあまきいび ナラテト元物ナラハ何をサノラニ
思まこま

松界ノ列号々々 ありかくち
花り一帯徑句し 誰賞春乎

ありかくち ありかくち
いさ極まはとちりせん一うり

ありかくち ありかくち
うしありとちり海てみし極む

花のうらむ
雲は細ありしうくまう

二品文のより君を

如 初め

院のさあつてお終つり

源乃冷泉院（中）とさ終へる也

后乃さやと見こるからたとむ

世 終

如 終好也 源氏 薫乃事成中を

さあつて

十四日二月は侍後りお終り終

如

薫元服し終ひて十日乃と

乃二月は侍後り任と申おに

ハ十六日兼あてお終り終

末乃巻りしあ乃初は同の

終りしああさとも昇進乃

決身とりし人侍進ん後し

十六日終除目り申お終

終つる

如

終乃十六日兼乃終申將り終

三つとられハ竹川巻くして年
紀乃相遠あり能なり共十四文也
林中約小但もろきて此也

秋右を中將よりなりて

^齊中約より紀て又支三年とて
後の巻に侍従とあり不審ま
と幸之 一長中將とあり
多ク御もつひ侍従を分ちて
侍従とけり別ははあり

^養自侍従任右近中將例

栗田開白道兼天元二十二侍従

寛和二十七十六右中將

自侍従年中任羽林例

宇治開白頼道長保五二天元服

同元八日侍従

内多きり此り六分と

冷泉院侍従

冷泉院由給之四位下叙しり也

此首書朱

黄イ頼道云
侍従ノ任タル
ハカリアリ羽林ノ
事不責記落
字致

昇 花鳥

いひこれ心りしなきふり

養

きしあふ人ともはりしあ達の

昇年文 秘

おしちりは多めはさしりしに

秘

冷泉院ちりく射りしきせり

也 昇

花

冷泉院の中乃射儀御曹司よ

し侍之

しりしはらんしりし

養

冷泉院之

しあし文しりし

昇

冷泉院林好中宮の 秘養

院乃ちら成

冷泉院中へ

こちしは太いしあしりし御しりし

しりし

秘

冷泉院の御子もくありし文一

不之柏木の妹冷泉院へ系りて
弘徽皇后ときこゆ家正腹へ 花界
うけりかくかいつきまふ

冷泉院乃女一文の西中へ

おきす 句

^養くく白とさうへー 養氏太切に
—— 終上事女一文り 猪若丸
たり

きしゆ乃文此西おほくの年月よきて

まさり給をひよこてい

^元秋好中宮乃西杉卯の年月に
まさりあよよくぬまてく 養此
杉はくはうーとたきりとおも
りしや也

^母冷泉院乃女文成り 清さう始
りとおとくは又秋好中宮と
うけり成りてー 清さう始り
とあやう成りてと中々人乃

尺とくまのふとせ 昇

花鳥鏡つら

美

薫とは秋好の西子れくく
あふは冷泉院の皇女乃あみよ
勝者たぐく西自志あふ事と
併秋好の清籠をのれ中り
ふくくるりゆふあうとせ

こしはい。白紙さふか

かしくりさうと

美

云界乃目りハ是かしく中せ
しりぞありふ極さうとせ

花鳥よ秋好よくくぬきん薫
るさうとたかきんしかりん

とくし水と

くく文をりしはあゆ西とこあひ

女三宮と 朱雀の御女

は君乃いて入あふ

薫きん

いとあはれめて

女と文乃 甚志候及れり一より地
とあはれあはれ候ふ家のみりあ
り道よとやそ也

はさくく乃宮とら

吾文の所兄弟才の常一隆文より
他服りておんまはれ式了御文
白文申替文皆的所申文の
所とらと

いとあはれと

院東宮とら一はあてて
及た美あり母文へ孝心
とほくそ縁の力候とらと
此とやそ也

おとれららりけのうとらと

差中將為拍木権大細文子事
史及之

側因のきくとは鬢髻下

さうきふん

善
実父の拍来うと内人の知を
かきりや

文よりのきき

女三女一のかりさうしき
せしあし波まのりし事あはし
んひしりよあけく

せんげうふいしりまきりし
せんさとり

糸

地流本くい太子とあり善巧の
羅睺羅ノ名成へし未変事
也いさ波拍来うり成事し
よ志りしりし

糸

せんげう書流本女は或くい太子
言て月しき瞿夷善巧同名
乳耶修多羅し因位瞿夷女
也羅睺羅生し時事
見河海 善巧て尋く

何

耶輸多羅比丘尼子羅睺
羅者佛出家後經於六
年誕生大臣亦疑之耶輸多
羅抱兒放火投之不燒是則
誓言言也

此因緣見悲華經

瞿夷太子、羅睺羅也佛出家後
後六年、生れ、（い）、（い）、（い）
人、（い）、（い）、（い）、（い）、（い）
と回地きん、（い）、（い）、（い）、（い）、（い）

源六条院とけりあり事とや
ととと

あうういにてあつるなき、（い）、（い）、（い）、（い）、（い）

ゆねれより成り

六条重徳とありに中宮のあり、（い）、（い）、（い）、（い）、（い）
とありとあり

并 六条文の徳より、（い）、（い）、（い）、（い）、（い）
乃ほとありとあり

苑 中宮のあり、（い）、（い）、（い）、（い）、（い）

多分一町ありて宮とて東院八町
の中ふれり入れり

秘

宮とあり四町

ほとりとも八六条由是町四町

とあり八町とこじり

二町四方成へ

何

うりかのかの物種云紀伊國じりの郡に

津とひれふね松といふ長き山の上なる

濱のりともありは四方八町の内は紫檀

蕨芳々るるをうりて云々と

枚本として金銀垢瑠璃瑪瑙の

石殿と作らりて東陣の

とに八条山南の所のとに八条

くけ西の所のとに八条の材やと松

の材四面とありては四方

のともとては事と換りては松

孫は源氏のまいたため小造り

町の内は四季ともけては

いふらお似たり

式る言

^秘業上乃文文之

御賀此事多いれう(おほ)まうらう

又或うの文々十の御賀と業上用

之なりまじ

并 御賀事 一部賀義人叙不因法

事三六業所經方命終未信事は

あり

おそそけふ過しーくま

事なるさありあり中ありん

三三三

あけしー人出家

六条院作し出して御候とま

としありてハ

^秘源氏日記 事因

本乃所いそ記此事

これハ六条院作りみごと事あり

何

此中一々事

何 此等乃るは年ノ満よりと候より候

後徳大寺在右記云試樂云不審

若年上ノ卷少と付河あり

清賀云 年満

三代實録才廿四元慶二年九月廿五日

已太上天皇延座碩字高僧年人於清和

院大設奇會講法華經限三日訖太皇

太后今年始満年之筭由是慶賀

修善祈禱餘齡親王云卿文武百官畢

此中賀礼事盟觴云云可勘

此中賀礼事盟觴云云可勘

此中賀礼事盟觴云云可勘

年長ノ義不用之 此年満

此中よいまて

源の此中よいまて

此中よいまて 秘 業上

^秘 葉上り

佛の口はうさうさ

その事

人々の口はうさうさ

^秘 花葉上り此中

流るるひま

^因 源と流るるさ

葉上り花葉上り

此の世は

流るるひま

式乃宮よ葉上り此の事

流るるひま

^秘 源氏式乃御文

夏乃宮よ

流るるひま

の流るる

流るるひま

因

まぬりぬうひりひのむねとらまひ
うりりし事うらむちよらわら
れ事しをし

かくあまこころはひねへぬ人たがうり
申ふらりしにうり

源の何まこ中よ業上とてして
してねらうら事しをれんを公く
し思ひこころ事しをれんを公く
る乃んをこころ

こちあまこころふねひこね

式の御文へうりしこころ
ハ業上の徳よこころね事しをれん
をれんをこころ

めいほくよおねをた又こころの世ふ何
まうりまこころ

は業上れ業をれあふらりしを
よまかすた又けぬ事とハ元後れ
花うまこねをた式る文の心

北乃...
ハツキ

紫の継母...
あましんまありぬ

女御乃...
秘

王女御立后...
と...
おのり...
ゆりぬ事...
ハツキ

八月...
ハツキ

ハツキ
八月...
ハツキ

ハツキ
八月...
ハツキ

河
六条院 河原院と換す...
ハツキ

ハツキ
八月...
ハツキ

延長十七年...
ハツキ

大納言源朝臣奉進お院

延長二年正月廿六日...
院々御北院

いほりさうれきらハ中宮此のあり文

六条院ノ坤所則六条此是所の四時

と也仍秋好の列此府了ん

角にハ殿れ

巽よハ源の位より方

うしうハ都んうれ院よまみ流り

此安里也

いぬわのまらハ何れ流り

乾ハ明石上

何んが此取らりとい

もとの地も便あ〜

とは能く〜

みる〜

毎日〜

とけあ〜

と能く〜

もせれよ〜

母流是所のた〜

厚り氷乃多ぬさるべき

さういへばうらぐらう

うればよあひで

六条院へはゆらうり八月の秋はれ

ゆらうりよあひで

ゆらうり大井乃さうりの物さすく

暁漱大井く都よ近き野山とあり

むさうハを徳又ハをぬく

ゆらうり

うらうらうやむさ里飯のうら

ゆらうりあり

ゆらうり

牡丹の類云

并 牡丹と云ふ之の類よりあり

何 岩藤之膳と云ふ草河の白物に薔薇

花なりと云ふ

因牡丹牡丹と云流あり只名別

云んりおきてはよけて

うーうこれ町の東西ハ馬場殿

りとのふに競馬の鳥

五月乃御遊取

上馬と云

云上れと云 花日

馬場殿 埒 五月八馬ノ月廿ハ一洗云し殿元

才舎リヤトト云し殿下有甲殿有し

殿又寝殿リヨレノヤトト云カコト今奉

け羨不然野分奉寝取ラおと此尾

トイ（リ）し殿ニヨラサレハ只殿ノ字

訓ヲヤトトト以成之人リモ大馬ニ

ラサシ氏ヲバツトト十ト云ニ殿ノ
字ノ例ニ

みー乃海らハまきこおとてはつたて
みくまらなり

いぬ井れ町の四面ハ明石の位
乃山ととよえ小とつらよけて
倉町あり

いんハふなりはう原

私由多ありありありあり

明石上ハ中文の山母

即人乃ころほひ

六条院へありつりの法

彼岸舟法成道経云一切衆生依時二

八月舟十方世衆一切衆生離苦得楽

又瑞而已

彼岸者二八月舟會時來到彼岸真

波羅密 廿云到彼岸

礼 時正るれはくうり日とより

一多しゆ

あまのく一衣よ移徒阿人となりか

とひうりまとして中宮ハ渡津延行

おりのたきしれをゆめむらゑ里

けふのハ紫上り花散里りりり

あま

去れはまろひハあめ比ま何り録と

あまよ何るねとをんといつて

まろり

由車十よ由人にて位五位くら

秘 紫上りの由りりり 七目

私 六位ハまろりりり

あらあまはとんハ

源中あれはらはらひるれハ

まにかよの事ハ何るぬと

在りまろりりりりりりりりりり

そおとろく〜うめ〜いとは好

何^カ有^カカ(り)ミル(し)有^カ略^カ也

源の信(ト)ミヨシ

い海(カ)此(水)者(一)能(也)

花(黄)里(じ)お(よ)は(ら)の(里)その(本)は

う(の)ろ(ひ)ま(と)あ(わ)

た(さ)〜お(〜)

は(策)上(乃)出(さ)る(あ)ふ(さ)れ(ら)り(ぬ)

と(し)

侍(後)乃(表)う(ひ)て

秘^カ夕(常)之(花)散(里)は(侍)中(一)の(ま)

う(あ)る(と)て(う)〜は(り)は(り)

は(花)黄(里)と(世)は(れ)〜お(よ)は(ら)

に(は)く(さ)す(〜)も(ま)ま(〜)

ま(れ)と(侍)者(〜)〜

か(く)あ(ら)〜

て(う)〜

女房のまはれゆきしゆらるるまじはちの
こまげえ

何宛に細ふ

女房れつる祿なりとされしよあてこ

ゆふしうりゆし

いふか
五十六日にて中宮

姫好の六条院へもつありまじ

ゆきしんとあま

秘
女乗上れゆきしありまじあひらきしゆは

これハ親一様とくへいふま

私女義めり女乗上のゆきしありま有

略しゆまといふしあり是も有略

ありと中宮よておつ子似あま

てまふぬといふま

ゆきいといれまをれあり

これあり秋好中女乗上りといふゆ

中ふららあひてまのたかゆと

くれらりし

らうなととさうくゆふかより

あかゝこなこけ廊下とおか

けらうくさうまき

廊下と釘かきしてあういよか

けうまのあうとあらうまきし

おまうくえもいん

秋好中宮乃撃

こねたにめてまう坊

紫丸ぬく中宮乃ひり

あきこのあ色

くさハ乃衣袂何若上乃

紫菀色 面蕪芳裏ハ

かきし并う何よまり河こあハ

らすうけりりハ紫菀又ハ

歟 一物あうくら紫ハ乃

くら菫の何うさうハ

くさハ乃くさハとねハ

さうけり

秘 紫乃心丸

秘 龍乃上東門院の由事と云きり

秘 龍 采花物語云いりし乃右の心丸は

子行いさりけきしはまれば世にこれ

たとてさぬくげりせよかたしと

ありきせよひてうい乃んる海をきと

是ハ上東門院の由事し

しる事よきなり

いし乃極秘秘しと云き中書

さししんし

杖持官

心し去海りそれハそれハ家名をいれ重と

風乃心てよきなりと

秘 心し去よ心しと云きし心丸の

ありし心丸と云きし心丸の

心丸の心丸と云きし心丸の

心丸の心丸と云きし心丸の

心丸の心丸

葉上乃こののんこ

西書上

凡ちりりみらひかりし去の色といふは
乃松よりひいていれいあ

秘

お葉ハむらひかろふと云若松
乃去れと云ふれぬれと云
ふし松のむら松のあくもらと
と早下と云ふての松と云
松河よハいりて松よけてい

或所況
下ハ早也
凡ちりりみらひ
色といふは
白物なり若松
松ハ七ナクハ
雲ニヨリ先ヨ
モタセタリ
云々

とあり又詞あをさおのりあは松
とあり

何

いりりの松ハ葉の松ハ万葉ハあえ
あぬハあぬ松ハあぬいぬあぬ
云んをほりり事ハ造花ハ松ハ
云

或ハハ若松の松ハはまていれ
何り初ハ同とありたあ
拾遺云元良親王初香飯なり

ふかかたと若くはゆるせて家々く
のちけいふとまらそくまき
せ。

所花と人乃子おれらりるま
まういとはまよまい

かくとむらり

業れく屋て思ひらりるま

宮の風して笑と

あひんらり

私中宮乃いま

おとこれもみら乃いせうま

海の助言

去乃花はりり

^私胡蝶の巻れ席よりいふ

多りた娘乃おもハサ

^花中宮とあひく娘は思ひます

より 同 同

し 三々記す

何
（長）

いとわろわろ

源丸はさ海

かき廻りおしなるいし一井しきり

りりし

秘
程きうりい町八町りら

かきいりりし

や

大井のいり

秘

明石よ

いさろしは始りて

ろしやこれそ始るは

とく十月ふりり

